
真夏の夜の夢

ガジル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夏の夜の夢

【Nコード】

N5321A

【作者名】

ガジル

【あらすじ】

俺（山口和也）は友人の岡田と海水浴に来ていた。なんやかんやで女をナンパすることになった俺。そこから少しずつ始まる物語・・・。

プロローグ

沖縄に暑い季節がやってきた。

真つ黒にこげた肌が印象的な島人、透き通るような色鮮やかな海。この世に新しい命として誕生して16年、そろそろ彼女がほしかった・・・

まだフリーの俺（山口和也）は友人の岡田と海水浴に来ていた。

「暇だね」

岡田はそう呟いた。

「そうだね」

と俺も言った。

何しに来たんだろうか・・・

海水浴も案外つまらんな、男だけじゃ・・・。

するといきなり岡田はこの雰囲気振り払うような発言をした。

「ジャンケンで負けた人女ナンパしようぜ！」

また、そういう事を言い出すんだからコイツは・・・

まあいつか！

「分かった、ジャンケンポン！」

・・・・・・

負けた。

「あひゃひゃひゃ！お前の負けだ和也！」

「はいはい・・・行ってくるよ」

周りを見渡して俺好みの女を捜す。

俺も馬鹿じゃないから

「へい、彼女」

などと言う、ありがち不埒野郎ではない。

ここは正攻法で行くまでだ！

（何で場慣れしてるような発言をしているんだろうか・・・）
発言はしてないけどな、まあいい。

一通り見渡していると、髪型、顔、スタイルと壺にハマる理想の女を発見した。

男の勝負をここで投げ捨てるワケにはいけないけど、やはり緊張する。

年にしてまだ純情少年な俺だった・・・。

（制限時間なんてないんだ、タイミングだよタイミング）
とりあえず彼女が見える日なたの浜で座って様子を伺った。

（国民よ、この俺をストーカーなんて思わないでくれよ）
やがて日が暮れてきた。岡田からメールがきた。

『何してんだよ、さつさとやれつての！』

もう遅いから俺は帰るけど、お前はナンパの続きやっつけよ！
お前に彼女ができるかどうかの企画なんだからな！』

（いつからそういう企画が設けられたのだ岡田よ・・・）

あえて返信はせず、心の中にしまっておいた。

さて、いい加減話しかけないと夜になっちまう。

まだ彼女の姿は確認できるが何やら友人と話している様子。
そして彼女は海に向かって走っていった。

「あの子まだ遊び足りないのか？」

まあ良しとして、こういう風に勝負に出るかな・・・・・・・・
少し考えて頭の中で整理がついた。

（彼女と海で遊ぼう）

早速勝負に出ることにした俺。

しかし、俺たち二人にはとんでもない事が待ち受けていた・・・。

危険なナンパ

海へと向かう彼女の様子を俺はまだ伺う。

いつの間にか彼女の友人はいなくなっていた。

もうすでに夕日は海に4分の1沈みかかった頃、とてもじゃないが未だに話しかけるタイミングがない。何かを必死で追いかけているみたいだ。

さすがにじれったくなつた。

俺は早歩きで彼女に近づいた。

「ねえ、君……って、アレ？」

……彼女の姿が無かった。

馬鹿な！俺はさつきからずっと！……

………

待てよ俺、冷静になれ

ひよっとしたらもう帰っちゃってるかも知れないじゃないか。

（何だよ、ハハ……んじゃ俺も帰ろーっと）

スマン、岡田……彼女は知らぬ間に消えていた。

俺は更衣室に戻り、ひとまず彼女を確認しようと早めに着替えビーチ入り口で待っていた。

（何してんだよあの子……）

3分くらい待って何かが脳裏をかすった。

（まさか！）

ふと思い立った俺は私服のまま海に向かって走り、飛び込んだ。

（な、何だこの勢いのある潮の流れは！）

やばい、早く探し出さねえと……

（何処だ！何処にいる！？）

奥の方へ潜り、水深5m辺り。

（くっそ！目が痛くて確認できない・・・本当にあの子は海にいるのか！？）

いや、ダメだ。きつという！

目をこすり、再び海に潜る。

（何だ・・・？何かがボヤけて・・・）

その何かに向かって泳ぐ。

苦しそうにジタバタしている。

（あの子だ！！）

足が岩に引っかかっている彼女、岩をどかしてやらねえと・・・
両手で岩をしっかり掴み、どかそうとする。

（お、重い・・・）

やばい、息が・・・

はやく、はやくどかさねえと！！

（どっけえええ）

徐々に動く岩。力強くどかしていく。

（今だ！）

彼女を掴んで水面へと泳ぐ。

「ハア・・・ハア・・・」

お、おい・・・大丈夫か？」

彼女に尋ねたが気を失っている。

「くそ、無事でいてくれよ！」

目と体が痛い。

浜辺まで結構距離がある・・・少しでも気を抜いたらソコで終わりだ。
必死に前へ前へと進んでいく。

(もうちょっと・・・もうちょっとだ)

・・・

・・・

彼女を探しに行つて1時間以上経つた。

辺りは真つ暗だ。

何とか助かつた俺と彼女。

どうやら彼女は寝ているようなので、目が覚めるまで俺は眠ることにした・・・

弱虫な自分

静けさが辺り一面に広がる夜の海。

こんな時間に人間二人がいていいのだろうか・・・
そもそも、ここで働いてる係員？っていうのかな？

ここらへんに安全確認で来るもんだと思ってたのだが・・・来ない。
俺は今、体が疲れて動くこともままならない程・・・と言うのは過言だが、さつきから中々寝付けない。

ひとまず彼女を起こそう、親が心配するだろうし。

「おい、起きろよ！」

しばらく肩を揺らしていると、彼女の目はゆっくり開いてきた。

「え・・・あれ！？今何時！？」

把握しきれない状況の中、彼女は驚きを隠せず叫んでいた。
今の発言からすると自分が溺れていた事など忘れて、ずっと眠っていたなどと勘違いしているのだろう・・・。

「君、海で溺れてたんだよ」

混乱している彼女を制するように俺は言った。
すると彼女は俺の存在に気付いたらしく、

「そう言えば私・・・綺麗な貝殻を見つけて、追いかけていたら潮に飲まれて・・・
じゃあ、アンタが私を？」

いきなり初対面の女に「アンタ」って言われたらキツイが、ここはグツと堪えた。

「そうだよ、結構助けるの大変だったぜ！」

すこし照れている感じで俺は苦笑いをした。
すると彼女は

「誰が“助けて”なんて言っただけ？」

正直余計なお世話なんだけど？」

・・・

俺は彼女が次に言う言葉を分かっていたつもりだった。

命がけの救出など棚に上げて、余計なお世話と話をまとめる彼女・

・少しムカついた。

でも、彼女もいきなりの出来事を前に素直になれないだけだと思う。

（まあ確かに彼女は“助けて”なんて言っただけだし・・・ハハ・・・ムダ骨だったな。）

俺は何も言い返さなかった。いや、何も言い返せなかったのかな・・・。

「何よ、その“お礼の一つでも言っただろうだ”と言わんばかりの顔は？」

調子に乗らないでよね！じゃ、私は帰るから！」

そそくさと帰る準備をしている。

説教の一つや二つ、当たり前だよこんなヤツ・・・。

あれ？だったら説教してやればいいじゃないか！

なのに・・・何でできないんだろっ・・・。

弱虫だな、俺・・・。

やがて彼女の帰る姿が目映った。

その姿を見守るように俺はしばらく、その場に座っていた。

やがて俺はびしょ濡れの状態だが、何も言わずに帰路を行く事にした。

今日の反省

家についた

早速、筋肉痛でベッドに横になった

携帯は、しっかり手に持って帰ってきている

「ピロピロリロリン」

いきなり電話が掛かってきた。

さーて、誰だろな？

・・・

・・・岡田だった。

「はい・・・もしもし？」

「何だよ和也、元気ねえなー結局、女GETできたかよ？」

「GETどころか、相当嫌われた・・・」

「は！？どういう会話したんだよ？少なくとも和也だったらイイとこまで行くと思ったんだが・・・」

「途中まではよかったけどね。でも、俺は今回の出来事で学習した事があるよ。」

それは“女は見た目じゃない”という事さー！

「面食いのお前がよく言うね（笑）」

「んじゃ、気分悪いからコッラへんで・・・」

「お、おい！何があつたか教えるよ！」

ピッ！

ツー・・・ツー・・・ツー・・・

電話を切り、再びベッドに横になる。

「今、何時だろ？」

時計に目をやる。

8時40分

「まだ飯食つてねえや」

起き上がり、冷蔵庫の中の簡単そうな食材を手取る

親が中々帰ってこなく、ほとんど一人暮らしの俺

もうこんな暮らしには慣れてきた。

フライパンを準備し、火加減と油の量に気をつけて調理をする。

「よし、できた！」

目の前に、から揚げ、餃子、玉子焼きを並べる。

「んじゃ、いただくか」

ハイスピードで飯を口の中へと運ぶ

口の中でとろけ、しつこくない後味

うん、我ながら素晴らしい出来栄だ。

「うまいなあ、マジで」

自己満足が度を越えてきた所で完食。

まだ9時を少し周ったところ・・・

特にやることもない。

「まあいいや、寝るか！」

電気を消し、ベッドに横になった。

暗闇の中で俺はふと今日の出来事を思い出す・・・。

（それにしても・・・なんだよ、あの女・・・助けてもらってその態度かよ）

再びイライラが俺を襲う。

でも、ホントに見た目は良かったのになあ・・・

（もう、あの女とは関わんねー！）

心にそう誓った。

世の中、完璧な女なんていねえ・・・

そう思わせるような体験・・・

ナンパなんてこりごりだ。

もう少し、じっくりといい女を捜してみよう。

もう少し、女に対して免疫を持とう。

もう少し、自分を磨いてみよう・・・。

バッティングセンター

朝、起きてからすぐ俺は散歩をした

朝食より散歩を優先した理由は単純に歩きたかっただけ。
夏の日差しは少しキツイけどそれがまた気持ちよかった。

「どこか寄って行こうかな。」

そう考え俺はある所に足を運んだ。

家からはそう遠く離れてはいない場所にある

俺の趣味&暇つぶしとして最適な“バッティングセンター”

野球自体そう得意ではないけど、ただボールを打つことだけなら好きだ。

あと、このバッティングセンターは面白いことにホームラン賞があり、一日一日賞品が変わる。今日の賞品は大型液晶テレビ。

しかし、手に入れるには10球のうち、5球ホームランを打たねばならない

球速は140キロで変化球ありでばらばらに投げられる。

「ま、この店にや悪いけど・・・儲けさせてもらっよ。」

微笑み、自信ありげに俺はバットを手に持つ

そしてお金を入れて、準備OK

「さあ来い！」

1球目・・・

ヒュッ！

スカッ！

手元で落ちてくるフォーク

さっきの勢いは何なのかと問われんばかりの空振り。

「ま、まだまだ！」

2球目・・・

ヒュッ！

カッ！

ど真ん中ストライク

バットにかすっただけで情けない飛距離を出した。

「くそ！こんなはずはねえ！！」

残り8球に神経を集中・・・

スカッ！

スカッ！

スカッ！

カキーン！

スカッ！

カキーン！

スカッ！

スカッ！

まともに当たったのもホームランまではいかなかった。

「ちっ！壊れてんじゃねえか！？このマシン・・・」

「アンタが下手くそなんだよ！！」

背後でイラついた表情をし、何とも聞き捨てならない発言をする女性・・・

俺は目を疑った。

間違いないならば、そこにいる女性はあの時海で溺れていた女の子だった。

「お前、何でここに!？」

「ん？私はここの娘なのよ、誰かと思って見てみれば・・・ハハ！面白いモン見せてもらったよ」

「けっ！嫌な女だな」

「嫌な女で結構！・・・それとアンタさ！フォームがダメダメだね。もうちょい足広げて、腰下げてみ」

「ほほう、それだけでうまくいくかね・・・
んじゃ、もっ回やってみつか！」

カキーン！

カキーン！

カキーン！

カキーン！

カキーン！

・・・

・・・

早くも5回ホームランを出してしまった俺。

「あー、何でホームランすんのよー!!」

私これスゴく欲しかったのに・・・」

どうやら賞品が一日ごとに変わるということは、お客さんが賞品を手に入れなければ自分たちが貰うということらしい・・・。

（てーか、そんなに金に余裕があるのかよ・・・）
と問いたい。

「ま、これもお礼みたいなモンだと思いなさい！」

「お礼？」

「そうよ！いちいちくだらない事思い出させないで！
賞品は後でこつちが届けるから、さっさと帰りなさい！」

何やら怒り出す彼女・・・

本気で悔しいみたいだ。

少し悪い気がしながらも、俺はダッシュで家に向かった。

ムカつく一日

目を覚ましてから1時間とちよつと時計は12時を指そうとしていた。

「つてーか、俺起きるのおせー・・・」

大体13時間眠っていたことになる

体に悪いので今後は早起きすることにしよう。

「腹も空いてきたし、メシ食うかな!」

買い置きしておいたカップラーメンを食べる

俺的に自分で作るラーメンよかよっぱどおいしい。

簡単でおいしいというのは最高だぜ!

「ごちそーさまでしたー・・・と!」

ベッドに置かれてある携帯電話を手取る。

「岡田からメールきてる・・・」

内容はこんなものだった。

“和也・・・聞いてくれ!実は俺、好きな人ができたんだよ。

でも俺、女に対する免疫ないし・・・どうにかして仲良くなりてえんだ!

頼む和也!俺の相談に乗ってくれ!!”

と、いうことだった。

恋話には何かと興味のある俺なので乗り気だ。

ひとまず返信しようとした時、

「じゅめんどさーい」

そう言っつて玄関に入ってくる女性は見覚えのある女の子。

「はい、これテレビ!」

彼女はそう言っただけで、重たそうに持っていた箱を下に置く。

「わざわざありがとな!それとお前・・・なんで俺ん家知ってんだ?」

「内緒・・・」

「は?もしかして俺に惚れてる?」

「うわ!引くーーーー・・・よく冗談でそんなこと言えるね!」

「まあいいとして、また遊びに行くからな!んじゃ!」

そう言っただけで俺は部屋に戻ろうとしたが彼女はそこから動かなかった。

「酷いなあ、そんな風に追い返す?私、午後は暇だからちょっと話そうよ」

別に追い返したつもりなどこれっぽっちもない。

むしろ普通の対応であつたのではないだろうか・・・

「おじゃましまーす」

「あ、待てよ!勝手に俺の部屋入んな!」

礼儀を知らないつつつか、図々しいというか・・・

何なんだよコイツは。

「よいしょっと！」

普通にベッドに座り込む彼女。

何でだ・・・

何で知り合ったばかりの年頃の男の家、しかも部屋でそんな堂々としていられる？

「んで、なんか言いたいことでもあんの？」

「べつつにいー、ただ暇だからさ！」

「ならこの前の友達の家でも行ったらどうだ？」

「だって遠いんだもん」

「はあ・・・・・・」

呆れた俺はお茶とお菓子を準備してやった。

このままだと会話など続きそうもないと思ったから・・・

「食ったら帰れよ？」

「嫌だ！」

何でだ・・・

何でそんなに俺ん家にいたがる・・・
特に用もないくせにこの小娘は・・・

何だこの腹立たいい気分は・・・

「一つ聞きてえんだが、俺に何を望んでいる？そして何を企んでいるんだ？」

「別に・・・そういうことは何も！」

やつべー、いらいらしてきた。
ついに俺のとつた行動は、

「お客様、あちらが出口となっております」

と俺は丁寧に玄関のドアに手をさした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・馬鹿！！」

突然家を飛び出していく彼女

一瞬だったけど彼女が泣いてたような・・・

ホントにワケわかんない・・・。

俺が悪いって言うのかよ？

いいさいいさ、これでよかったんだ

まっすぐお家に帰ってたんだ。

ザー・・・

外で何やら地面を叩きつけるような音がする。

何ともタイミングの悪いドシャ降りの雨だった。

やかましいくらいに鳴り響く雨の音

辺りがだんだん霞んでいった。

そして彼女の姿も見えなくなった。

・・・・・・・・

「あー、もう！ムカつく一日だぜ！」

俺は傘を持って家を飛び出した。
必死で彼女を探す。

さらに勢いを増す雨の中、俺は走った。

「おかしいな。そろそろ追いついてもいいはず・・・」

俺は彼女の家まで走った・・・

「すみませーん！誰かいますかー？」

そんな俺の声に気付き、男の人が外に出てきた。
おそらく彼女の父親だろう・・・

「あの・・・娘さんは家にいますか？」

すると父親は

「いや、帰ってきてない・・・一度君の家に行っただが？」

その通り

しかし、彼女を怒らせて追いついてしまったなんて言えない。

（親父さん、スミマセン・・・）

心の中で俺は謝った。

「分かりました、ありがとございます」

「私も一緒に探そうか？」

「いえ、結構です。すぐ見つけて連れてきますので・・・」

俺はまた走り出した。

まさかとは思うけど、心当たりのある場所へ俺は向かった・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5321a/>

真夏の夜の夢

2010年10月10日03時15分発行